第一節　道教の由来

昔支那に方士と称するものあり、神仙を奉祀し、導引、服餌飛昇、変化の術を説く秦の始皇および漢の武帝深くこれを信仰す。のち方士等曲解して老子を道教の開祖と称し老子荘子の書をもって仙道の書となし老子を深く崇拝して仙道の長となし天地創造の神の次の位に列せしめ、自ら道士と称せり。一時他教を圧するの隆盛を極めたる時代ありしも明清に至り衰運に傾き、道教を信ずるものは中流以下の社会のもの多きに至れり。いわゆる君子は閑雅清談に楽しみ、小人は符呪奇怪を喜ぶ的にして智浅く無学蒙昧なる徒輩多き台湾においては今なおこれを信じ、疫癘あれば医薬をしりぞけ呪水を服し、変災あれば門扉を閉じて法符を貼するもの多し。また道士は支那にあっては観と称する寺廟様のものありて定住し、かつ本山より籙（ろく ※かきもののこと）と称する免訴状を得てはじめて道士たるを得るの資格を有するものなり。しかるに限に本島にあるところの道士は一人も籙を有せるものなくその住所もまた普通人と異なるなくただ神壇に奉祀せる神明の異なると門頭に何々壇と書しあるを異なりとす。

第二節　道教の崇拝する神明

（一）玉皇上帝

玉皇上帝いわゆる元始天尊にして天地を創造し万物を化成したる神にして上、玉京にありては万神の王となり、下紫微にあっては仙神の主たるもの神なりという。

（二）三清天尊

三清天尊とは清微天・禹余天・大赤天の三天をいう。すなわちはじめの精気大羅天より分かれたるものにして元始天尊の作用を分かちたる敬称なり。あたかも仏における阿弥陀の知恵を勢至といい、また慈悲を観音と称するがごとしという。

（三）三界公

三界公、一に三官大帝と称す。後漢の張陵および張衡なるもの天地水の三界とし、人の病めるは平常罪あるがゆえに神罰を受けしものなりといい、病人の姓名を書せし服罪状三通を製し天地水の三界に分かちて投ずれば病癒ゆと言い伝えり。今台南三界壇街の三界壇および大銃街の元和宮にあり巫覡の下降する神はおおむねこの神なりとす。土人は悪報多き神なりとして大いに恐怖す。

（四）李老君

李老君、また太上老君という。すなわち老子なり。道士等牽強付会の言をなして李は玉皇上帝より直に秘道を受けたるものにして道教の開祖なりという。

（五）張天師

張天師、後漢の張道陵なるもの四川省成都府崇慶州の西北にある鶴鳴山に入り秘籙（ひろく）を労使に受けたりと称し盛んに符水禁呪を行い愚民を惑わしたり。道士等曰く、天師は白日昇天したりという。その弟修角またこれにならいついに黄巾の賊となれり。張道陵の子孫その法をつぎ、その玄孫、江西省広信府貴渓県の竜虎山にありて今なお世襲し盛んにその道を伝う、すなわち道教の本山なり。道士たらんものはこの本山より籙を受け初めてその資格を得るものとす。本島人曰く、竜虎山の正門を通る者、全盛人間たりし人の転生は妨げなきも、もし前世禽獣

たりしものの転生して人間となりたるものは正門の閾を跨ぐとき必ず前世の動物に復生すという。張道陵のいまだ天師たらざる前刀筆吏を務む。天師となりて竜虎山に入りしのち、かつて上官たりし地方官、来たって天師を訪う。天師これをみるに驚くべし、この人前世亀の転生なり。天師いわく、貴官は前世亀の転生なれば正門より入るは不可なり、すべからく側門より入られよと告ぐ。該官大いに怒っていわく、汝昔日の恩を忘れ、天師の威を藉（か）り不遜の言をなすと。天師大いに嘆じのちその徒弟に呪符を渡し、該官の閾を跨ぐ際、もし亀と化成せんとするものあれば速やかにこの呪符をもってその頭部を撫ずべしと。命じ終わって正門を開く、該官意気揚々として将に正門の閾を跨がんとせしとき、はたしてその頭部より亀首出ず。徒弟直に呪符をもって撫し、事なきを得たりと。このごとき荒唐無稽の妄語をなし、愚夫愚婦を惑わし、もって勢力ある道教の一派をなせしものなりという。

第三節　道士

第一款　道士の職務

台湾にある道士は僧侶と同じく死者の冥福を祈るため棺前に読経し、収斂ののち棺蓋の釘を打ち送葬をなす。

二　人の疾病を加持祈祷して治すと称し、または人をして疾病に罹らしむることを得る符法をも知れりといい、人の依頼に応ず。

三　安胎・産婦のいる房間には必ず胎神と称する神居りて、産婦を守る。しかるに産婦誤って胎神に触るるときは胎神怒って出産を困難ならしむという。産婦は何時何処にて胎神に触れ居るや不明なるにより、あらかじめ安産を希（ねが）い安胎と称する祈祷を依頼するものあり。道士はその依頼に応じてこの祈祷をなす。

四　収煞［シウソア］（※煞は殺の意味）、家の新築、移転等には時として邪神に触るることあり。邪神は怒って必ず家人を傷うという。かくのごときときは道士に依頼し収煞と称する祈祷をなす。道士はこれに応じて法素［ホアツソオ］をもって邪神を縛し、その害を除く祈祷をなす。

五　起土［キイトオ］、墓地を作るため土地を掘りまたはその他一切の土工事はあるときは土神の怒りに触るることありと称し、起土すなわち土神の怒を防ぐ祈祷をなす。道士はその依頼に応じこれをなす。

六　建醮［キエンチオ］、建醮とは瘟疫流行等の鎮めをなす祈祷をなすをいう。

七　起安醮［キイアンチオ］、起安醮とは数年に一回または臨時に行う祈祷にして街庄内の安全を祈る祀りをいう。

八　水醮［ツイチオ］、水災除および水災の際溺死せし死者の冥福を祈る祈祷をなすをいう。

九　火醮［ホエチオ］、火災除および火災の際死せし者の冥福を祈る祈祷をなすをいう。

十　開光醮［カイコンチオ］、開眼と同じ神仏の像を安置したるとき神霊を請し来たり宿さしむるという。仏像・仏僧共に道士必ずこれを行う。

十一　洗清［ジエチェン］、眼病に罹りたるものは邪神を凝視したるにより神怒りて眼を病ましむるものなりといい、道士に請い洗清を行う。洗清とは道士神前に読経し後、符法とて一種の呪文を唱え符すなわち札を書し病者に与う。病者はその符を水に浸し眼を洗う。しかするときは眼病直ちに癒ゆという。

十二　搶神［チウシヌ］、人驚怖の結果失神することあり、かくのごときときは道士に請うて搶神と称する祈祷を行う。その法道士まず人事不省なるものを床上に横臥せしめ、その前に立ちて螺を吹き鈴を鳴らし呪文を唱え、失神者の心魂を捕え来たりその体中に入れ、再び蘇生せしむるものなりという。

十三　収驚［シウキア］、小児夜泣、もしくは疾病等は邪神に驚かしめられたるによると信じ、かくのごときときは道士を請い収驚すなわち驚きを収むる祈祷をなす。しかるときは邪神去りて病全快すという。

十四　用法素縛［イエンパツソオバク］、難産にして母子共に危険なるときは、道士に請い法素を用いて胎児を縛して産出せしむるときは母のみは安全なりと信ぜり。法素とは木製の一尺ばかりの蛇首蛇身の半身下部は細帯状の布紐を縫い付けたるものなり。道士は口に呪文を唱えながら法素をもって産婦の傍らを打つ。しかるときは暫時にして胎児死産すという。法素は台南馬公廟の神前卓上および同金安宮永華宮の神前にあり、その他道士のなす奇々怪々なるもの枚挙にいとまあらず。しかし職務として当然のごとく考えいるはおおむね以上のごとし。なお呪文邪符邪術としては各部において詳述するところあるべし。

第二款　道士の祈祷と囃方

道士他人の依頼を受け祈祷を行う際、依頼者の希望により囃方を附す。囃方は鼓笛・喇叭・銅鑼等の楽器を奏して道士の読経を囃す。道士自心も読経の間に螺を吹きて奏に合わすことあたかも諸芸人の囃のごとし。その祈祷および囃方の時間は徹夜にして上中下、特別等の区別あり。すなわち午夜と称するは正午より夜明まで、一朝は昨夜半より今夜夜明けまで、そのた二朝三朝みなこれに準じて長く、その騒動敷きこと極まりなし。しかるに彼等は瀕死の病人の傍らにて平気にてこれを行い、病人もまた何ら苦痛を感ぜずというに至って迷信力の真に恐るべきを知るべし。